

願成寺報

令和元年九月十日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎ 〇五三二・五二・九六〇一

■ 秋季彼岸・永代経のご案内

今このままを慶ぶことが 仏様への報恩です
そのままの慶びをご一緒に見つめ直しましょう

○餅つき・草取り会

猛暑の疲れが残ったままですが、
大切な行事の準備をします。
皆でやれば、きつと楽しい！
春き立てのお餅をオヤツにします。
是非、ご参加下さい。



九月 二十日(金) 午後一時半 餅つき・草取り会

二十一日(土) 午後一時半 法要のみ

二十二日(日) 午前十時 法要・法話

正午 お斎(昼食)

午後一時 法要・法話

法話 浄泉寺(岡崎市)

住職 戸田恵信師

鐘の音

タバコを止めた人と、毎日の決め事(ルーティーン)を怠らない人間はスゴイ。無条件に尊敬します。戸田先生はそんな人で、冬の半年間は、朝五時半に寺の鐘を必ず撞くそうです。時間がズレると近隣に指摘されて悔しいらしく、毎朝キツチリやり遂げます。本当に頭が下がります。願成寺に鐘楼がなくて良かったと思います。

今年の夏は「平気で生きていく」をテーマに過ごしました。それは「もう、どうでもいいや」と投げやりになる心の裏返しでした。大きな不満がある訳でなく、だから闘志もわかず、ちよつと疲れた感じになっていました。還暦が近づいて知力体力に衰えを感じるし、先が見えた観もあって、どう生きていこうかと…

昨年の中国地方・豪雨災害で仮設住宅に暮らすお嬢さんが、テレビのインタビューを受けていました。不慮の災害でひどい目にあっている人です。グチを並べても文句を言う人は無い筈です。

「わたし、奇跡に気がつきました」

「家があつて、家族がいて、朝ごはん食べて学校へ行って、お風呂に入って寝る。いままで当たり前だと思っていたし、退屈もしていた日常は、失ってみたら奇跡だった。幸せな時間だった、そのことに気がつきました」

本当は奇跡なのに、気づかず不平ばかりを募らせている私。そのお嬢さんにも頭が上がりません。

損得や善悪に縛られながらも、奇跡を感じる感性を保ちたい。その感動を伝えたい。その為に来ることは何だろう…

仏に繋がるルーティーンを大切にすること。
頭の中で先生の撞く鐘の音が響きます。

弥陀ノ報土ヲネガウヒト 外儀ノスガタハコトナリト

本願名号信受シテ 寤寐ニワスルコトナカレ

《源信大師和讃・親鸞聖人》

● 正信偈ノート ②⑤ ・ 源信章 II

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

黄色の勤行本の

四十ページから

極重悪人唯称仏 我亦在彼撰取中
煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

極重の悪人は、ただ仏を称すべし。

我また、かの撰取の中にあれども、

煩惱、眼を障えて見たてまつらずといえども、

大悲倦(ものう)きことなく、常に我を照らしたまう、といえり。

〔浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〕

・ 極重悪人 観經・下下品に説かれる五逆と十悪を作る極悪人

平生に仏や善に遇わず 地獄に墮すべき者だが

臨終の称名念仏にて その罪を除かれるとされる

・ 我亦在 天台僧として世間の評価も高く 自身を厳しく戒め

ている源信和尚が 自身をも極悪人と自覚し

称名の救いを頼んでおられることに注意が必要

・ 大悲無倦 弥陀の大悲は衆生が どんな無慚な在り方でも

見捨てることなく その在り方に寄り添い

仏に育てようと 慈しみ働いている

・ 善悪を創り出す悪人

ワイドショー等、悪を斬る番組が高視聴率を採るようです。私も

憤っている事柄を代弁してくれて、共感できればスッキリします。

事が国家の一大事だったりすると万感も伴います。それは自身

の問題を一時忘れさせる清涼剤のようです。自身を善の側に置いて

「そうだ、そうだ!」と…その無責任な清涼感が誰かを傷つけて

いるかもしれない。例え無自覚であっても、その罪を閻魔様が

赦さないとしたらどうでしょう…地獄往きと裁定されるかも知

れません。凡夫を忘れて善を想うと悪人が生まれます。

・ 凡夫の善悪

リストラは企業の存続にとって善であり、される側には悪で

す。現代で体罰は無条件に悪とされますが、罰する側も痛い、痛み

の共有だ。となれば如何でしょう。戦争は正義と正義の闘いだとい

います。在るべき理想を勝手に描き、それに照らして正義を揮いま

すが、普遍的な正しきがあるでしょうか。他を己に服従させ同一化

しようとする心が、善や正義の中にある気がします。それは、その

まま「迷い」だと思えます。

・ 仏の善悪

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺

唯除五逆誹謗正法 (仏説無量壽經・第十八願文)

阿弥陀仏は、至心／信樂／欲生(仏の大悲を慶び浄土を願う心)を善

として、その心で称名念仏する者に、撰取の姿を顕します。ただし、五

逆と謗法の者を悪として、(除くという言葉で) 抑止されます。

・ 五逆罪 親殺し等、謗法より軽いので詳細略

・ 謗法罪 仏の教えをそしり、正しい真理をないがしろにすること

真面目に考える程、謗法の罪を免れることは出来ません。正しい真理

なんて知らないし、だから知らずに仏の教えを謗っているかも知れませ

ん。この文章もそれに当たるとも知れません。

仏の眼を透せば、私達は悪人でしかありません。けれど仏は、その

悪を嫌わず迷いを照らし、わざわざ抑止しすることで撰取します。その

功徳に触れる時、私達は私の善悪を我執と知り、頭を垂れて世界の多様

性を承認し、仏の子として、平気で生きる道を見出すのでしよう。

・ 源信和尚が厭離した穢土(孤独)

我、今、帰するところ無く、孤独にして同伴無し (往生要集)

弥陀の浄土に帰する事なければ、地獄の住人で終わってしまいます。

それでよいのか? と問いかけています。

創作・頻婆娑羅(ピンバシヤラ)王の覚悟

幽閉された牢の中で、王は独り、逆に自由を感じつつ溜息をついた。囚われの身では、国にも妻子にも責任を負うことは出来ない。何も出来ないのだから、迷うことも強い意志を示す必要もない。疲れていた王は、無責任な自由の中で、ふと釈尊を想った。

― 立場が違うのだ

私は国王として、釈尊の様に清らかには生きられなかった。釈尊は清らかさの為に、シヤカ国の滅亡と民の虐殺を看過したが、私は王として善悪を裁き、戦争で血を流し、深重の罪を作ってきた。人天の裁きは受けない王だが、仏罰は免れないと確信していた。

― やっとその時が来たのだ

だから妻が飲食を身に隠して会いに来た時、面倒くさいと思った。悩みや愚痴を聞かされても、対処出来ないし、考えたくないのだ。

― 独りにして欲しかった

もう王ではない。けれど、夫であり父であった。

飲食のために少し活力が出た。

― この囚われた身体で妻子の為に何が出来るであろう…

息子に父殺しの罪を負わせない為に、自死を考えた。

そのことの是非や方法を、はじめて、釈尊に相談したいと思った。

釈尊からは目連と富楼那が遣わされた。

― 王が自死しても、新王の罪は減じられない

― 釈尊は、妃と新王を無明凡夫の代表として、必ず導き遂げる

― 王は命終後も妻子を見守る事が出来、必要ならば声を届ける

王は、釈尊に蟠った心が解け、やっと真実に帰依した。

仏の大悲に照らされた安堵の中で、自ら作り他に作らせた罪の、その咎を、家族と共に真摯に担っていく覚悟が定まった。

『王舎城の悲劇』の父王について創作

逆縁から人は学ぶ ― 読書からのエピソード ―

「この世界には順縁とともに逆縁があり、悲しみはつらいけれど悲しみからも大切なことを学ぶことができるかも知れない」と、私が無気なく話すと、彼が、自分の妻を亡くされた話を私に聞かせてくれた。そのなかで、彼は微笑んでこう語った。「順縁ではなく、逆縁からしか、人は本当の優しさを学ぶことができなのじゃないかなあ。誠実さとは、最後まで見捨てない勇氣、一緒にいる慈悲の心だよな」

彼の話に聞き入りながら、ふとある情景を思い出した。それは、数年前の一月初め、雪の降りしきる日のことである。福井の圓照寺副住職の案内で、越前海岸にある水仙の里公園を訪ねた。水仙は、真冬に咲いて、かぐわしい香りを放つ花であり、本願寺ご正忌報恩講には、仏華として供えられる。その越前海岸の水仙たちは、厚い雪雲の下で、凍るような海風の吹きつける岸壁に、風に向かって、小さく震えながら咲いていた。その時、揺れる水仙を風の中で見ていると、いつの間にか気持ちが透きとおりに、厳しい環境の中でしか咲かない花の清らかさを感じた。逆境の中で咲く花は、はかなくもかけがえない。どうしようもない悲しみを通して本当の願いや優しさが芽生えてくることを、水仙は教えてくれた。そう私が話したら、彼は、私にこう応えてくれた。

「亡くなった妻は『すべての赤ちゃんは祝福されて生まれてくる』といつもいつて、どんな障害のある方でも笑顔で話しかけていた。そこから今、私はこう思う。『すべての花はそれぞれの願いがあって咲く』とね」「苦しみにも意味がある」と改めて感じ、彼にも感謝の気持ちで一杯である。



『アジャセ王の救い―王舎城悲劇の深層』

鍋島直樹(著) ISBN4-89480-009-8

あとがきより(一部変更)

行事予定 〓 令和元年秋以降 〓

九月二十二日（休日） 秋季彼岸・永代経法会（戸田恵信師）

お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時（昼食）あり
午前十時〓

十一月三日（日・祝） 本山納骨堂法会・団体参拝

本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前七時〓ろ集合

十二月七日（土） 報恩講

御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時（昼食）あり

土曜日 午後一時半から

日曜日 午前十時から

毎月一日

月例会

* 十月は二日に変更します 午後二時〓 時間変更の場合等あります、寺まで〓確認下さい

本山納骨堂法会・団体参拝〓案内

市内近郊のご寺院様と貸切バスにて日帰り参拝します

■ 期日 令和元年 十一月三日（日・文化の日）

■ 日程 六時三〇分 寺集合

十時三〇分 本山着

十五時三〇分 おちよぼ稲荷

十八時三〇分 豊橋着（予定）

* 予定時刻は変更になる場合があります

■ 会費 八、五〇〇円 バス・昼夕食・旅行保険代他

■ 納骨 納骨希望の方は一霊につき二万円（納骨冥加金）

■ 申込 願成寺まで〓連絡下さい（十月二十日まで）

■ 他 〓不明な点は寺までお問い合わせ下さい



専修寺 戸田本山 国宝

後記

〇 著者に無断で本から転載しました。罪滅ぼしも考えつつ、本の宣伝をします。

鍋島直樹(著)『アジャセ王の救い』は、父殺しの罪を慚愧(深く後悔)し、罰を恐れるアジャセが、釈尊の導きによって救われていく過程を題材に分析し、「生きることの意味」を考えた本です。

親不孝な生き方しかできていない私は、福音となるだろうと読み始めましたが、手強くて… ずっとベットの横に寝かしてました。本紙で、悪人〓罰〓地獄を考える為〓奮起して読み終えました。やはり示唆に富む本で、特に六師外道(六人の仏教外の思想家)の教えと釈尊の教説の違い等、読み切れてない部分が多く再読が必要で、ベットの横に戻しました。

罪によって罰を畏れたり、赦しを乞うたり、そういうことでなく、罪を慚愧するとき、その我にしか感じ取れない世界がある。それは無垢の子犬の姿や蝉の懸命な鳴き声、一凛の水仙かも知れないし、思ひ出された亡き人の無言の共感かも知れない。

私を見捨てず、共に泣いてくれる働きに拘わられていくいのち。

転載した水仙のエピソードは、折れそうな心が支えられて、生きる意味に目覚めていく物語として、心に留めたいと思います。

〇 当初は、「孤独の六道」と題して、源信和尚が厭う迷いの世界を考えようと思っていました。

・ 地獄 身体の痛みによって、他を害してしまう孤独

・ 餓鬼 食欲の渇きによって、他を貪ってしまう孤独

・ 畜生 不自由の障りによって、他を怖れてしまう孤独

・ 修羅 力を持つ憂いによって、他を敵視する孤独

・ 人間 自身の不浄〓苦〓無常に迷い、他を惑わす孤独

・ 天 慢心により、他を見下してしまう孤独

源信和尚に怒られそう、ボツにしました。

メンドクサイ理屈より、領かれさる縁を大切に
にする方が仏教的ですね。

鍋島先生に感謝です。

